

レポーター

氏名	山本麻子
所属	株式会社アルファヴィル

建築諸元 わかる範囲でご記入ください

名称	建築と映画の狭間
主催	同志社大学、立命館大学、メディアショップ
所在地	京都府、滋賀県
開催日時	2014年 6月6日、7日、8日

建築概要、特徴、評価する点など（800～1,600字程度）

### 3日間にわたって行われた「建築と映画の狭間」

去る6月6日から3日間、珍しい催しが立命館大学建築都市デザイン学科スタジオデザイン研究室（堀口研究室）、同志社大学今出川校地学生支援課、MEDIA SHOPの共同で行われた。「建築と映画の狭間」。タイトルどおり、建築と映画についての催しだが、キーパーソンとして「物質試行」で著名な建築家の鈴木了二氏が招かれ、氏の著作「マテリアルサスペンス」からうみだされた「建築映画」なる新たなジャンルについて、初日の映画上映、2日目の鈴木氏に建築家梅林克氏と立命館大学准教授堀口徹氏を交えた、建築と映画に関する対談、そして「物質試行」とその影響を若手建築家と語る3日目まで、もりだくさんな内容となった。

### 「建築家のひそかな楽しみー物質試行の行方」

今回は中から、筆者がゲストとして参加した3日目の様子をレポートする。「建築家のひそかな楽しみー物質試行の行方」と題された3日目は、まず学生時代から鈴木了二氏の作品に影響を受けてきた2人の建築家、島田陽氏と山本麻子が現在の活動を、「建築映画」に触発された新しい視点から発表した。島田氏は、「建築映画」においてしばしば重視される、確固としたふたつの世界をつなぐものとしての「窓」そして「踊り場」をテーマとして、これらの場所をいかに既成の概念やスケールからずらすことができるかという試みを、実作をもとに示した。一方山本は、アナログフィルムに写し取られる豊かな諧調ある影を、建築空間の中にいかに実現してきたかについて発表した。

### 「DUBHOUSE」とは？

これに対して第2部では、鈴木氏自身が物質試行50から54まで、住宅、美術館での展示、展示を撮影した映像、そしてドローイングと他ジャンルにわたりながら、同じ「DUB」というキーワードを持つ作品群について解説した。「DUB」とはダビングの語源であり、もともとは音楽用語だが、鈴木氏はこれを「圧縮や引き伸ばしといったデジタルデータ等にイメージされる加工を施した後も、ある種の表現の強度を保つこと」と定義しているが、この「DUB」を、名だたる有名建築や絵画にほどこしてみても（氏はこれを「DUBをかける」と表現した）その強度が保たれるかを判定しようというのが、2日目に行われた「DUB MATCH」であり、そこには、現在固定化されてしまった「歴史」に、コンテンポラリーな視点からゆさぶりをかけることで再考をうながす、氏の強い視線が通底している。

### 「建築映画」とは？

その後、モデレーター立命館大学准教授堀口徹氏も加わったクロストークでは、そのようなゆさぶりの試みとして私たち若手建築家のプロジェクトに賛意を表されたうえで、新たな建築のジャンルとしての「建築映画」について、さらに新進気鋭の映画監督三宅唱氏が、中学時代に母校を舞台として撮影した映像作品を見ながら、話もりあがった。「建築映画」は映画に表現され、ストーリーと重なって、場合によってはストーリーを超越するほどに、存在する建築を定義したものだが、氏の著書「マテリアルサスペンス」で写真をあげながら詳細に示される事例についての解説は、場所や建物の選定から、これをカメラ（視点）でどの高さから、どんなレンズで、どのようなシークエンスで撮れば、このような効果が出るのかといったことを探っていくものだが、これはまさしく建築空間を設計していくときの思考と同じものであることにあらためて気づかされた。つまり「建築映画」は映画を素材とした「建築」なのであり、物質試行に見られる作品の広がりも、あくまでも「建築」を広くとらえ「建築」的な思考をつきつめることで、対象が自然に世界全体へと広がっていくのだと。その証拠に、当日、会場となった京都の老舗ブックストアであるMEDIA SHOPには、建築関係者だけでなく、映像、音楽そして一般の方までが定員を大きく超えてつめかけ、最後の質問の時間まで好奇心にあふれた、闊達な意見が交換された。このような、建築にどっしりとした基盤をもちながら、他のジャンルの人たちと興味を共有することのできる催しが、関西でこれからも多く催されることを祈念する。

左写真：「建築と映画の狭間」3日間の催しのフライヤー。

写真は展示作品であり映像作品である「DUBHOUSE」。

右上：会場風景。左から鈴木了二氏、島田陽氏、山本麻子

右中：島田陽氏の発表した「怒」と「踊り場」

右下：山本麻子の発表した「白い影のグラデーション」

**鈴木了二** | Ryūji Suzuki

建築家。1944年生まれ。1968年早稲田大学工学部建築学科卒業。竹中工務店設計部、建築設計事務所を経て、1977年 osama 建築設計事務所を設立。1983年鈴木了二建築設計事務所に改称。現在に至る。1997年より早稲田大学教授。2004年6月、2020年まで早稲田大学芸術学校校長を務める。1977年「物質試行37：佐木倉プロジェクト」で日本建築学会作品賞受賞。2003年「物質試行47：金刀比羅宮プロジェクト」が第18回野村胡堂賞受賞。美空家とのコラボレーションや映画製作も積極的に行っている。

**七里圭** | Kei Shichii

映画監督。早稲田大学在学中から映画の現場で働き、「ほんまに好きさん」(2009)で東宝子猫映画賞を受賞。以降、映画作品は「魔法の箱」(2017)である。主な作品「龍崎組」(2017)。

**山本麻子** | Asako Yamamoto

建築家。1971年福岡県生まれ。1994年京都大学工学部建築学科卒業。1995-2006年ハイゼン建築設計事務所勤務。1997年京都大学大学院修士課程修了。1997-2008年山本建築設計工房。1998年独立建築家。1999年ワグネル・建築士事務所設立。主な作品：「New Kyoto Town Home」(2010年、第1回建築雑誌賞)、「House Folded」(2011年)、「高野山ゲストハウス」(2011年、第44回建築雑誌新人賞)。

**梅垣智也** | Tomonori Higashi

作曲家・電子音楽家。アコースティックの作曲家のみならず日本唯一のフルの演奏家。国内外で数々の指揮にもあたっている。主な作品：CD「Mabuhay」(2011年、MOTIL)。

**島田陽** | Yo Shimada

建築家。1972年神戸生まれ。1997年京都大学工学部建築学科卒業。3Dアーキテクチャ建築設計事務所設立。主な作品：「六甲の住居」(2012年、第29回LIXILデザインコンテスト2012金賞)、「辻義平の住居」(2010年、「9月の住居」) (2013年)。主な著書：「TUPAKU YO SHIMADA」(2012年、Olivier's出版)。

**6月5日[木]**  
同志社大学  
楽梅館ハーディーホール  
〒605-8585京都市中京区西ノ京1-1-10  
（京都市営地下鉄東西線西ノ京駅西口徒歩5分）  
（京都市営地下鉄東西線西ノ京駅西口徒歩5分）

**6月6日[金]**  
立命館大学BKC(旧9号)キャンパス  
トリシア1階 デザインルーム1  
〒590-0262京都市東区山崎1-1-1 約11分  
（立命館大学バス）（京都市営地下鉄山崎駅西口徒歩5分）

**6月7日[土]**  
MEDIA SHOP  
〒600-8408京都市中京区錦町5-1-10  
（京都市営地下鉄東西線錦町駅西口徒歩5分）



# 建築と映画の狭間

Between Architecture and Film

シネマトグラフが大都市と結びついて発展し、既に1世紀以上がたつ。その間、シネマトグラフは映画として、様々なジャンルに発展していった。その中で建築や都市があたかも主役のように映画に現れる映画を「建築映画」として定義し、「建築」映画双方に新たな可能性を提示した建築家・鈴木了二氏を迎え、また違った視点から映画について、建築について考察していく試み。「建築」と「映画」を結びつつ、分断する「狭間」に開かれる新しい世界とはどんなものなのか。圏を極限まで追求した共同監督作品「DUBHOUSE」と鈴木氏が選んだ「建築映画」の上映、また監督の七里圭氏と鈴木了二氏によるトーク、若手建築家とのトークなど、多彩なプログラムを開催。

2014年6月5日[木] - 6月7日[土]  
5th - 7th June 2014

# 狭間

Between Architecture and Film

6月5日[木]京都市 | 同志社大学楽梅館ハーディーホール  
6月6日[金]京都市 | 立命館大学BKC(旧9号)キャンパス トリシア1階 デザインルーム1  
6月7日[土]京都市 | MEDIA SHOP

主催 | 立命館大学理工学部建築都市デザイン学科スタジオデザイン研究室、同志社大学今出川校地学生支援課、MEDIA SHOP